
魔女の森の騎士

逆様

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法の森の騎士

【コード】

N3894Y

【作者名】

逆様

【あらすじ】

少女と騎士の魔法の森でのお話。

ほのぼのじゃないようではのぼの、を目指したい。

0・満月の夜に

東の森には魔女が住んでいる。

闇夜に浮かぶランタン光に近づくな。

魔女の騎士に斬られるぞ。

悪い子だけは近づくな。

騎士は悪視る眼を持つぞ。

《魔女の森の騎士^{ナイト}》

0

満月の夜、両親の目を盗んで家から抜け出した。

村から十と数分ほど歩いたところにある丘で少女は月見をしていた。

昼間のうちに用意した団子を頬張り夜空に浮かぶ月を見てにんまりと笑う。

透き通る海のような空を照らす月はどこか幻想的で少女の胸を高

鳴らせる。

耳にはいるのは木々のざわめきと虫の声だけ。
まるで絵本の中に入ったような錯覚に陥り少女は自分の体を抱きしめた。

叫び声が聞こえてきたのはそれから少ししてだ。

驚いて少女は村の方向を見る。

思わず目を見開いた。

村が燃えていた。

原因はすぐにわかった。

この距離からでもわかる大勢の馬に乗った人間が村を襲っている。

野盗だ。

今から丁度十日前少女の村に少し離れた村が野盗襲われたと言つてその村の人達が逃げ込んできた。

少女の村は野盗の対策も用意されこの十日は平和ないつもと変わらない日常が過ぎていた。

が、一度襲われてみればこれだ。

立ち尽くす少女が見たのはこちらに向かってくる馬が一頭
頭が真っ白になった。

今まで考えていた両親や親友への心配が全て吹き飛んだ。

《恐怖》

せっかく用意した団子を蹴飛ばして丘を転げ落ちるように降りた。

森へ逃げ込んだのは偶然だ。

恐怖でまともな考えもまとまらないなか森の中なら隠れられるかもしれないと絞り出した結果だった。

しかしその考えも簡単に打ち消された。

少女が森の中に入ってすぐ野盗は森の入り口にたどり着いた。

運が良かったのはその森は地面を埋めるように木々が生い茂り馬はもちろんだの大人ですら通るのには苦労することと小柄な少女はその木々の間を通り抜けるに丁度いい大きさだったと言うことだ。

生い茂る木々が作り出す暗闇のなか近づいてくる足音から逃げ出すために走る。

枝や葉は服や肌を切り裂き起の根は少女の足をとり体を泥で濡らした。

先程まで幻想的に見えた自然が自分を邪魔をする敵に見え少女は呻き声を上げた。

それからどれだけ走っただろう。もしかしたらすぐ後ろに野盗がいるかもしれないという恐怖が少女の足を止めてくれなかった。

走って走って走った。

目に映ったのは淡いランタン光だった。

それを見ただけで救われたように感じた。
人、人がいる。そう考えるだけで力尽きた体に火が灯るようだった。

「たつす、けっ」

荒い息をつきながら少女は言葉を繰り返した。
たすけて、たすけて。
一言呟くにつれてランタン光が明るいさを増す。

「たすけっ……てっ！」

体をランタン光に向けて投げ出すような勢いで地面を蹴る。

待っていたのは打ち付けるような月の光だった。

眩しさに少女は目を閉じる。

再び開けた目見たのは一軒の家だった。

巨大な樹木で作られた家が月光にも負けないランタン光によって照らされている。

辺りはその家を避けるように円形に平らな地面が広がっていて上から見たら森に穴があいているように見えるだろう。

家の前には一人の男が立っていた。

月光とランタン光を跳ね返し銀の輝きを放つ鎧を纏った男。

男は森から飛び出していた少女を見る。

「たす、けて……たすけ、て」

遂に足が動かなくなり少女は芋虫のように地面を這って男に近づく。

鎧の男が少女に一步近づいた。

同時に森から飛び出す二人目の人影。

少女の体が恐怖でふるえた。

たすけてと狂ったように喚き両手をばたつかせる。

森から飛び出た野盗は何かを言葉にはしたが少女の耳には入らない。

「死にたく、ない」

最後に呻くように少女言って動くのを止めた。

その変わりのように動き出したのは鎧の男だった。

腕を一度だけ振るう。

たったそれだけで世界は色を変えた。

生暖かい液体が勢いよく少女の体を打つ。

雨ではない。

鉄臭く赤い。気が付くと先ほどまで喧しく騒いでいた野盗の声が消えていた。

少女はゆっくりと顔を上げる。

声は出なかった。

野盗の頭がなくなっていた。

首から上が無いという可笑しい状況で野盗は赤い液体を噴水のよ
うに吹き出している。

感じたのは恐怖ではなく安堵だった。

体から力が抜けていく事を感じつつ少女は笑った。

団子を頬張る時のように、

月を見上げる時のように、

体を打つ液体に酔いしれるように、

にんまりと、笑った。

薄れていく意識の中、少女は鎧の男を見つめる。

思い出したのは父の声だ。

《東の森には魔女が住んでいる》

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3894y/>

魔女の森の騎士

2011年11月10日01時11分発行